- 1 派遣期日 令和4年 8月 11日(木)
- 2 派遣先 【主催】 株式会社 東洋館出版社
オンライン Zoomにて視聴
<http://www.toyokan.co.jp>
- 3 研修内容
 - (1) 基調提案
「子ども主語」の国語科授業
～国語的瞬間をマネジメントする教師の力～
梅光学院大学 準教授 香月 正登
 - (2) 実践発表会
「自分事の学び」を創る文学の授業
～「やまなし」(光村図書6年)問いづくり実践～
広島市立袋町小学校 教諭 小泉 芳男
 - (3) ビデオ授業提案
「リフレクション型国語授業」の展開
～子ども主語の学びと教師の立ち位置～
筑波大学附属小学校 教諭 白坂 洋一
・单元名 述べ方の違いを評価して読もう！
～和紙は本当に世界にほこれるのか？～
 - (4) 協議会・総括

4 感想

(1) 基調提案について

今回の研修は、「子ども主語」の国語科授業がテーマになっていた。これまでの国語科授業づくりでは、主に教師が教え、児童が学ぶというスタイルが主流だった。しかし、これからの国語科授業においては、国語学習によって育まれる「ことばの力」を子どもたちが学ぶことができるようにすること、また、「学習者がどうなりたいか」という視点を取り入れ、授業づくりを確立する必要があるという考えを提案していた。そこで、教師と学習者の視点をどう位置づけて授業を展開していくかについて本研修で学んできた。以下は、本研修で学んだ教師が注力していくべき点である。

教師のマネージメント

- ①子どもが何をどう学ぶかを定める
- ②子どもと教師との協働で学びを構築する
- ③子どもと子どもの対話を促す
- ④子どもが学びを理解する

教える立場か学ぶ立場かという二分法ではなく、教師と学習者とが相互作用し合うダイナミズムの中で国語科授業を展開する方法を示していた。

(2) 実践発表について

「自分事の学び」を創る文学の授業として、学習課題と学習計画を児童主体で行っていた。初発の感想をもとに、グループごとに「問い」を設定し、分類・検討する活動を通して、学習者自らの学びを自覚し、深めていくことができると分かった。

(3) ビデオ授業提案について

①リフレクション型国語授業について

授業提案者である白坂氏は、ことばを学ぼうとする国語学習意識をもって、子どもたちが学びに臨んでいけるように、「リフレクション型国語授業」を提案し

ていた。この授業展開は、「学習者による問いづくり」「フレキシブルな学習形態」「学習者による省察（リフレクション）」という3つに視点を分けている。今回の授業提案でも、第1次、第2次は目標・活動の設定（問いづくり）を学習者に委ね、教師は伴走者という立ち位置で学習を進めていた。終末の第3次では、学習者は目標・活動を評価し、教師は、評価情報や見解を示し、省察（リフレクション）を行い、児童と教師で共創の学びを作り上げていた。

②「学習者による問いづくり」について

第1次では、初発の感想をもとに、「問いづくり」（単元の学習課題づくり）を行っていた。学習者が単元の問いづくりに参画することで、問題意識を明確にもって学習へ取り組んでいた。教師は、学習者が教材の内容への意識よりも単元の学習を通して育まれる「ことばの力」への意識がもてるように留意していた。

③「フレキシブル学習形態」について

第2次では、学習者が主体で活動し、教師は、以下の2つに注力していた。

ア 学習者同士の相互交流を促す

学習形態と学習環境のデザインに小グループ等の学習形態を授業に取り入れ、学びの複線化を図り、これらの活動を通して、授業内のコミュニケーションに重層性と柔軟性を生み出そうとしていた。具体的には、今回の授業で、ジグソー活動を取り入れていた。

イ 学びの状況を把握（観察）してフィードバックしながら、省察（リフレクション）を促す

ここでは、授業者が子どもたちを見守り、学びの状況を評価・分析することに徹していた。「学びは学習者の中で起こる変化に基づくものであり、教師が学習者に「させる」ことに基づくものではない。」と、提言している。

④「学習者による省察（リフレクション）」について

「省察（リフレクション）」は、自分ごととして学びを捉え直す営み（≒ふり返り）である。学習者自らが授業を省察することを通して、学んだことの自覚化することを目的としていた。「学習意欲の高まり」も期待でき、学びのプロセスの中で、学んだことを言語化し、味わい直す場をつくり出すことができる場面を設定していた。

(5) 研修の成果と課題について

今回の研修は、教師と児童の共創の学びという新しい学習形態の在り方を知ることができた。教師の立ち位置について深く考えさせられる内容であった。教師は、伴走者として子どもの学びを保証することや国語科の特性を踏まえつつ、子どもたちの学びをいかに広げ・深めていくかを視点に入れ、日々の授業を展開していきたい。

まず、単元の導入の段階では、教材の特性を生かすことや単元の学習目標に関連する身につけさせたい「ことばの力」の視点を押えながらも、児童の発言を基にした問いづくり・単元計画をしていきたい。

次に、学習活動の段階では、対話する場を大切にしていきたい。白坂氏は、今回の授業でジグソー活動を設定していた。「考えながら、同時に、考えていることを言語化」する体験を通して、子どもたちが、学んだことを自らのことばで考えとして明確に表現することを目的としていた。教材や問いに合わせて対話する場を設定することは、児童の深い学びに大いに有効であることが分かったため、これからも他の言語活動・学習形態の工夫の仕方を調べていきたい。

終末の振り返りの段階では、児童が自分の学びを自覚することができるよう、自己評価・相互評価する場の工夫を考えていきたい。協議の中で、教師と児童とどちらの立場でも適正な評価をするためには、どの部分で児童の学びを観察・把握していくか単元の導入で児童と確認する必要があるという意見があった。学びの中で児童が「何ができるようになりたいか」を具体的にイメージし続けられる手立てが必要なのだと分かった。児童の深い学びが実現できる授業構成を今後も追究し続けていきたい。